

歯科医師会が行う児童の歯肉炎をターゲットにした歯科保健教育プログラムの評価

○三浦喜久雄^{1,2)}, 松岡奈保子²⁾, 今里憲弘²⁾, 山本未陶³⁾, 筒井昭仁³⁾
¹⁾社団法人遠賀歯科医師会, ²⁾NPO 法人ウェルビーイング, ³⁾福岡歯科大学

(索引用語: 学校歯科保健教育, 学習援助型, 歯科医師会)

口腔衛生会誌 56 (4), 2006

目的:

小学校高学年になると歯肉炎に罹患している児童が多く見られるようになる。歯肉炎はそのほとんどが適切なブラッシングで予防でき、改善がブラッシング時の出血および歯肉の腫れの減少として児童本人にも確認できる。しかも即効性があり、指導する側も受ける児童も達成感を感じることができる。小学校における歯肉炎対策の実施は歯科的にも教育的にも有意義である。遠賀歯科医師会学校歯科部会は、岡垣町教育委員会の協力のもと、モデル事業として町立の小学校にて5年生を対象に歯肉炎予防改善教育を行っている。本事業を通じて対象校の児童の健康に貢献するとともに、新しい学校歯科保健教育システムを構築することにより、学校歯科医が、より積極的に活動できる学校現場が広がることを目的としている。

対象および流れ:

対象は、2004年度は福岡県岡垣町立E小学校(5年生全員106名)、2005年度は同Y小学校(5年生全員73名)である。教育は山本らが開発したプログラム¹⁾を基にした。プログラムは3回の授業で効果を確認したものであったが、学校側の時間的制約を考慮して2回に短縮して効果を検討した。1回目は歯肉と歯肉炎に対する知識・関心の向上を、2回目は自分にあった上手な歯磨き技能の習得と継続して歯磨きを続ける態度の育成を目的に実施した。調査は質問紙と口腔写真を用い、教育前および教育の1か月後と6か月後に行った。また児童は毎回の授業でふりかえりシートを記入しており、その内容分析を通して教育での気づきや学習内容の獲得具合を検討した。これらの調査を含み、モデル事業全体をProcess, Impact, Outcomeの3段階に分けて評価した。

結果:

概要を表に示す。

1) Process 評価: 担任が導入とまとめを、歯科衛生士が専門的な知識の提供、技術指導を担当し、お互いが得意な点を活かす事ができた。また、時間数を3回から2回に減らし、

コストと時間の効率化ができた。

2) Impact 評価: 児童の気づきが起こり、積極的姿勢がみられ、行動変容の基本である知識の獲得が確認できた。教員からは良好な評価を得ることができ、事業の継続・拡大につながった。

3) Outcome 評価: 児童に歯みがき行動の獲得と歯肉炎の改善がみられた。

考察:

歯肉炎をターゲットとして学習援助を重視した歯科保健教育を行い、1か月後、6か月後の知識、行動の変化、及び歯肉炎改善が確認できた。関係者である児童、保護者、学校職員、教育委員会の反応はいずれも良好で、過大な予算やマンパワーも必要とせず、回数も2回へと短縮し、現状の学校歯科保健教育への採りいれに十分可能なプログラムであると考えた。結果的に、E小学校のみでの実施予定が、教育委員会やE小学校教員の好評を得て、町立の全小学校での実施が検討されている。自律型歯科保健プログラムとして広く普及させていきたい。

文献:

- 1) 藤好未陶: 口腔衛生会誌, 55: 574-585, 2005.

表 歯科保健教育プログラムの評価

Process 評価	Impact 評価	Outcome 評価
マンパワー ・担任教師と歯科衛生士が協力して教育を担当した。 コスト/時間 ・3回の授業を2回に減らしても、同様の結果を得ることができた。	児童 <質問紙調査より> ・知識の増加が確認できた。 <ふりかえりシートより> ・取り組み姿勢に積極性がみられた。 ・気づきが起こっていた。 教員 ・担任教師をはじめ学校関係者から良好な評価を得た。 ・教師自身、歯科衛生士から指導を受け、それを児童に話すことで自分のこととして捉え、向上した児童の知識、技術を継続させることを重要と意識していた。 ・教師から、フォローアップのための追加授業の要請があった。	行動評価 <質問紙調査より> ・質・量ともに良好な歯磨き行動の獲得と、その継続が確認できた。 健康評価 <歯肉の評価より> ・歯肉炎の改善も見られた。